

人に頼る避難より自主避難を！

徳島市 50代 男性 消防団員

災害対応にあたっていると、避難する側の人の心構えが大事なのだと思います。「犬を飼っているので、犬を連れていってもいいか」とか、「寝る布団はあるのか」、「食うものはあるか」とか、いろんなことを言う人もいました。

市営住宅の人たちを避難させに行ったときには、消防団が車で送り迎えしてくれるというような考えでいるから、なかなか自分から動かないんですよ。みんな乗用車を持っているんだから、各戸で誘い合って乗っていったらいいのに、悲しいかな、それができない。何度も車で往復しなければならず、時間もかかって大変でした。

それ以降、台風時などの出水については早目の避難ということで、住民の皆さん方には、早い形で自主的に避難をしてくださいというようなマニュアルづくりをしています。

これからは住民の皆さんが自主的に動く自主防災会のようなシステムをこしらえておく必要があると思いますね。



まず老人会の会長さんをひっぱり出し

～地域の役割のある人から声かけ～

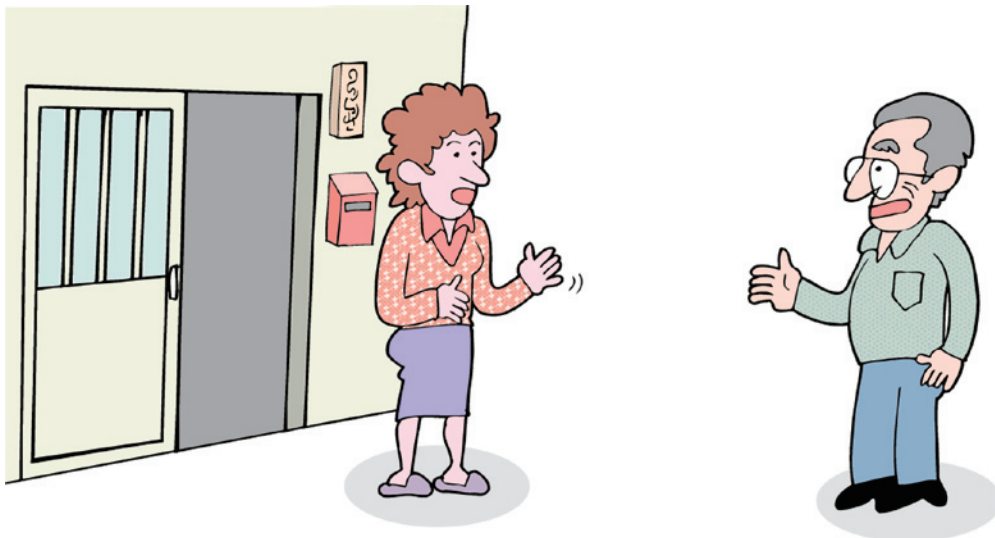
（神戸市 60代 男性）

私は自治会長だったので、地震の前の晩は夜中の1時半過ぎまで、なれない手つきでワープロでまちづくりに関する資料づくりをしていました。

ちょうど寝入りばなに、グラグラと大きな地震が起きたのです。表に出ると、となり町の空に真っ赤な火の手があがっていたので、「これはあかん」と思いました。そのあたりには、昔ながらのアーケードにつらなる市場があったので、そこに火が入ったら、アーケードに火が走ってすぐに我々の町に来るだろうと思ったのです。

自治会長の私だけでは、どうすることもできないと思って、地域の老人会の会長さんや、婦人会の会長さんとかに声をかけました。その人たちがそれぞれ自分の担当で動いてくれるだろうと思って声をかけたのですが、期待どおりしっかり行動されていました。

自分は何度か火災を経験し、火の怖さを十分知っていたので、「早く、火に近いところから助け出さなければ」と思っていました。埋もれている人の掌握にと、町を二回りしたところには、すぐそこに火が来ていました。ほんとうに火の勢いは速かったんです。



出勤か、救助か、悩む

～誰かがジャッキ、12人助ける～

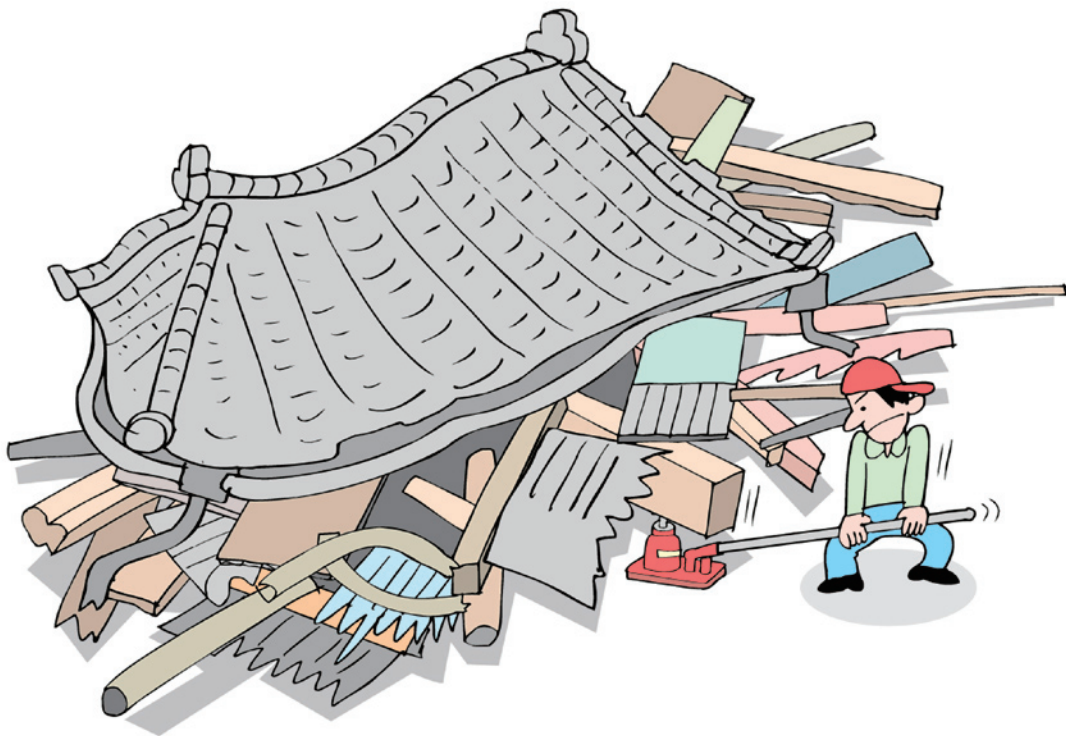
（神戸市 60代 男性 元市職員）

私の家はつぶれなかったけれども、周りはほとんどつぶれました。立場を考え、出勤すべきか迷ったあげく、その日は夜まで救助活動が続け、12人助けました。

家の下敷きになった人を助けたのですが、その助け方が難しいんですよ。上からいったら人の重みがかかって危険なので、下からもぐり込んで助けるんです。木造の建物などは、梁にジャッキをかませたりしてね。

最初、大きなジャッキでやろうとしたけど、重たくて扱えない。そのうち、近所の誰かが小さいジャッキを持ってきてくれたので、それを使って、ちょっとずつ持ち上げていきました。車のジャッキも使いましたが安定が悪くて、案外使いづらかったんです。

で、頭が入るぐらいの大きさまでになったら、そこからもぐっていくのですが、余震があるから、これがかなり怖いんです。私は田舎の百姓の育ちだったから、できたけど、町の人には難しいやろうね。



横浜市 20代 男性 会社員



土地勘のない場所では、携帯電話のナビだけが頼り

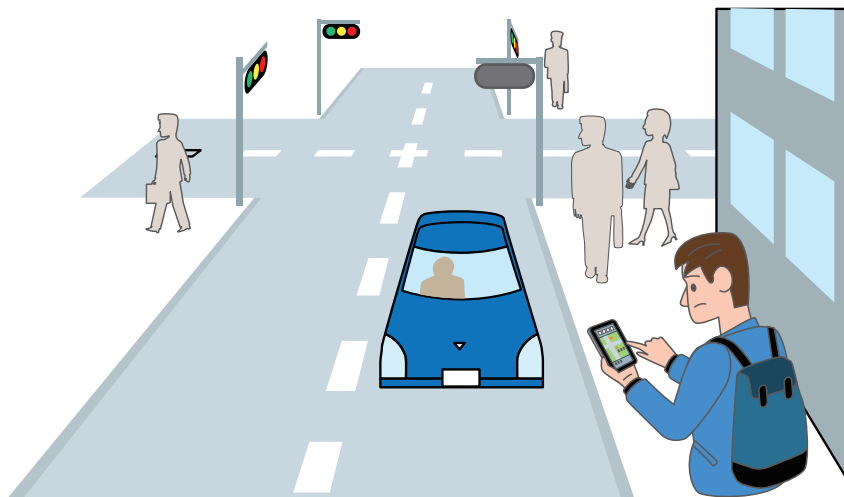
震災の日は、4月から勤める会社の研修で、朝から東京タワー近くのビルにいました。余震も続いたので、外に避難しましたが、周りのビルの窓ガラスが落ち、粉々に割れているのが目に留まりました。揺れも収まり、会社に戻りましたが、歩いて帰れる人は、次々と会社を出ていきます。

私は、会社初日ということで、このあたりに土地勘がなく、どう帰ったらいいかわからぬまま、夜10時半頃、とりあえず会社を出ました。目指すは、中目黒に住む友人の家です。

多くの人が歩いていますが、その流れは、どこに向かうものか見当もつかず、バス停の行く先や道路標識を見ても「中目黒」と書いてあるわけでもなく、頼りになるのは携帯電話のナビだけ。ナビの示す最短ルートは、日比谷線沿いの道。全く人が通らない細い道もありましたが、ちょっとでもナビのルートを外れる心の余裕がありません。

途中、無料でお茶や食べ物を配っている個人商店と遭遇。勇気をもらい、3時間ほど歩いて中目黒へ。結局、電車が動いていることがわかり、友人の家には寄らず、電車で帰りました。

携帯電話のナビには、本当に助けられました。もし携帯電話の電源が切れたら、その場にうずくまって動けなかったと思います。





電車の中で大地震と遭遇

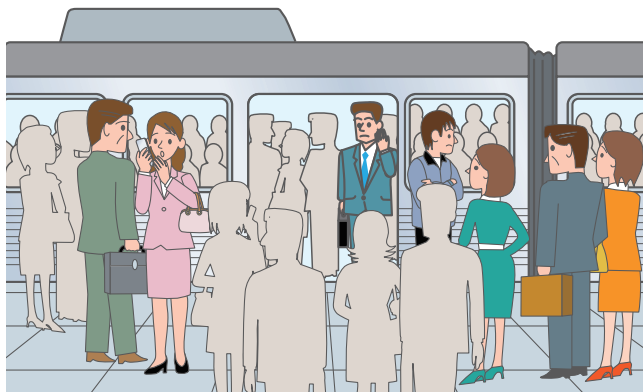
浦安での打ち合わせを終え京葉線に乗り、もうすぐ東京駅に着く…というタイミングで、地震に遭いました。電車は止まり、「ただ今、地震がありました」とアナウンスがありましたが、電車では地震の大きさもわからず、「大したことはないだろう」と思っていました。

そのまま電車の中で20分位待機。しかし皆冷静で、車内は落ち着いた雰囲気です。先頭の1両だけホームに入っていたので、車内を移動しホームに出ましたが、それも皆順番を守り、パニックに陥る様子はありません。

改札を出て地上に上がったところで、再び余震が。東京駅のそばで建設中のビルのクレーンが激しく揺れていました。携帯電話のナビを見ながら、知人のいる田町を目指しました。1時間半で到着。知人のオフィスはビルの8階。非常階段を上ると、壁がひび割れ、壁の建築資材がパラパラと落ちています。「ビルが崩壊しないかなあ」と少し心配に。ビルの中では「津波が来るかもしれないので、移動は控えてください」とアナウンスがありましたが、午後5時頃田町を出発。1時間半位で赤坂の自分の会社に到着しました。

そして深夜2時、Twitter^{*}の「電車が動いている」との情報を頼りに、会社を出発し、そこから自宅まで帰りました。電車が動き出すのを待っていた人達が、すでに帰路についた後の時間だったので、混雑は大したことはありませんでした。電車から降りる時には、思わず車掌さんに「ありがとうございます」と声をかけてしまいました。

※ Twitterとは、web上に公開されている、140文字以内の短い投稿(ツイート)を入力して、みんなで情報を共有する無料のサービス。



一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

----- 簡単な手順を紹介します -----

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

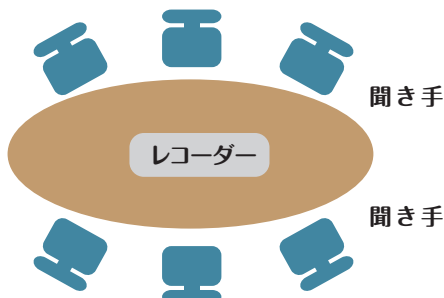
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらおう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集
※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどご自由にお使いいただけます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。



発行

内閣府(防災担当)

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1(中央合同庁舎8号館)

TEL 03-5253-2111 URL <https://www.bousai.go.jp>

